

令和 5 年産米がスタートする前に

～貯穀害虫の発生を未然に防ぎましょう～

(1) 貯穀害虫による被害について

穀物倉庫で米麦等に被害を与える害虫を一般に「貯穀害虫」といいます。貯穀害虫の発生は、異物・異品種の混入と同様に産地の信頼を失う大きな問題ですが、残念ながら毎年発生しています。

【五大害虫】

コクゾウムシ、ココクゾウムシ、コナナガシクイ、シメマダラメイガ、バクガ

※特に発生の多い害虫は、コクゾウムシとノシメマダラメイ

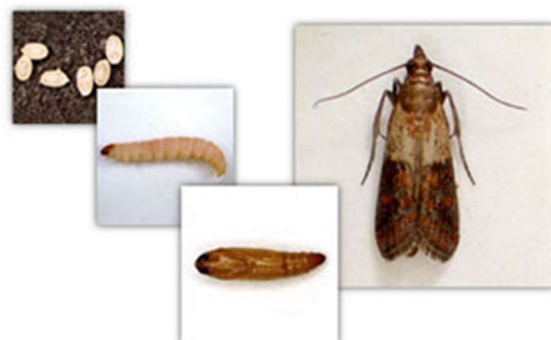
コクゾウムシ(穀象虫) :体長4mm、年2～5回発生
成虫はゾウの鼻のような長い口吻を持つことが特徴で、見た目ですぐ判断ができます。飛ぶことができますが、普段は暗所を好み穀物に侵入して穀粒内部を食害します。また、幼虫は産み付けられた穀粒内で成長します。成虫は秋になって気温(15℃)が低下すると、倉庫周辺の古材木・薪・藁や籾殻などの間、板の隙間などの温度変化が少なく、多少湿った場所を選び越冬します。幼虫は穀粒内で越冬します。

コクゾウムシ



ノシメマダラメイガ :体長6mm、年2～4回発生
成虫は開帳しても13～16mmと小さい蛾ですが、成虫の発生は4～5月頃から見られ10月頃まで続きます。成虫の寿命は2週間程度で、その間は何も摂食せずに交尾、産卵を行います。
成虫は、幼虫の餌となる穀粒やその周辺に200個前後の卵を点々と産みます。幼虫は、糸を吐いて穀粒の胚芽や糠層を食害しますが、密度が大きいとその表面は薄絹を被せた(つづり巣)ようになります。冬は幼虫で越冬し、その幼虫が翌年の春に成虫へと羽化します。

ノシメマダラメイガ



(2) 貯穀害虫の進入経路について

貯穀害虫は、倉庫の中でしか発生しない害虫と思われがちですが、中には圃場や森林等の自然環境下に生息している種類もあります。また、ノシメマダラメイガのように「光」に誘引されるタイプもあります。したがって、倉庫の密閉性や光源の管理が不十分の場合、貯穀害虫が庫外から侵入するケースが多々あります。

農家の納屋等で新米に付着した貯穀害虫を、JAの農業倉庫や販売先の米穀卸精米工場まで運び込まないようにするためには、生産現場での入口対策が重要になります。

(3) 害虫の発生を抑えるポイント

貯穀害虫防除の基本は、害虫が発生しないように倉庫内(下屋も含む)の環境を清潔な状態に保つ事です。

乾燥・調製機械を設置してある作業場や倉庫内に「こぼれ米」があると貯穀害虫の格好の発生源となります。また、作業場や倉庫内の四隅、壁際、入口扉付近は、死角になりやすい場所になりますので注意が必要です。

「清掃の徹底」が、貯穀害虫の発生を抑える特效薬であり清掃することによって、作業場や倉庫内の整理・整頓にもなり、異物等の混入防止対策にも繋がります。

異物・異品種の混入だけではなく、貯穀害虫の発生も産地の信頼を失う大きなクレームですので、乾燥・調製作業が始まる前に予防対策を行う事がポイントです。

残念ながら貯穀害虫が発生した後に散布できる薬剤はありませんので、改めて小まめな清掃を心掛けるようお願いいたします。